滞英2年の生活を顧みて
－3－

大　学

35日間の船旅を終えて　わたしがロンドンの港に到着したのは　霧雨の降る寒々とした2月7日の夕刻であった．　British Council の人が迎えにきてくれていたが税関の都合でその日は上陸できなかった．　しかし　その日のうちに長い間同じ学問を研究するものとして文通のあった　Seager 博士と電話連絡がつき　翌日の会合を約した．　後で聞いてみると　電話を通じてのわたしの英語は　ほとんど理解できなかったそうである．　なまじ知ったかぶりをしてすらすらと話そうとすると　かえって通じなくなるものらしい．　単語のられつでもよいから　ゆっくりと並べたてたほうがよく通ずるのである．　これは結局　アクセントの置き方をわたしたちがよく知らないことから起るのであろう．

翌日は土曜日で週末だから College に行っても教授に会うことはできないというので British Council の紹介で Kensington Garden 北側の安宿に泊ることになりその日1日 Seager さんが London の町を案内してくれた．　道路の交通標識を1つ1つ教えてくれるほど　かゆいところに手のとどくような親切さを示してくれたのである．　日曜1日おいて月曜日の朝 British Council の車で　顕微鏡やほかの持参したたくさんの荷物と共に London の中心から西方約20マイルの距離にある Royal Holloway College へ案内してくれた．　カレッヂの正門を入ってその庭や建物の美しさにびっくりした．　まるで古城のような建物で　学校とは思われないほどである．　後で知ったことだが　この建築は　フランス南部にあるお城をまねたものであり　英国本来の建築様式ではないそうである．　わたしのいた物理の教室は別棟となっており　そこで　Tolansky 教授にはじめて会った温顔のたいへん親切で人なつこい人がらである．　教授の案内でカレッヂの食堂の high table で初めての食事をとったのであるが　それまでの船中での豪華な食事に慣れていたためか　食事がなかなかノドを通らないで困った．　午後　教授秘書のCollar 夫人が下宿のリストを渡してくれ　教授から当分の間の実験計画について相談され1ヵ月ほどはインド人の博士コースの学生の Joshi 氏から繰り返えし干渉法等の実験法の練習をうけることにきまり　早速その日の午後から始めた．

実験のあいまをみて下宿探しをするわけであるが　わたしはまだ言葉に全く自信がなく　下宿の交渉などとうていできるわけはないのであるが　教室の連中で自分でいって交渉してやろうといった好意を示してくれる者は1人もなく　リストを渡しその中から自分で適当に探し出せという態度である．　しかし　これは決して冷淡でも日本人に反感をもっているからでもない．　当座は英国人とは　ひどくとっつき難い冷たい人種だなと思ったものだが　その後の生活で段々と彼等の気持がわかってきた　つまり心の中では十分な同情を寄せてはいても決して出しやばりな世話焼はしない．　それぞれが自分自身で生活を守っていくのであって　その自主性によそから口をさしはさむまいというのが　彼らの基本的な考え方なのであろう．　この態度は外国人に対しても　自国人に対しても同じである．

たとえば　わたしが話す英語は当初はなはだブロークンであり　発音もへたであった．　わたしが話していて間違いをおかしたとき　英国人は注意してなおしてやろうという世話焼は決してしない．　そういうことをするのを礼儀にはずれたことと考えているらしいのである．時がたち　だんだん親しくなって　わたしの方から頼んで　はじめて　言葉の誤りを指摘するようになる．　それもすまなそうにする．

ともかく　こうしたわけで誰も一緒に行ってくれそうもないので　しかたなく　リストの中で一番良さそうなところを選んで　夕方交渉にいった．　広々とした庭にかこまれた坂の中腹にある大変立派な家であった．

Collar 夫人から電話連絡があったらしく　そこの奥さ

春先きに一番最初の花を咲かせる snow drop
(College の庭にて)

んがよろこんで迎え入れてくれ　部屋を見せてくれた. 大変良い部屋でわたしも気に入りそこにしようかと　内心思っていた.　しかし　それから奥さんがわたしに色々のことを話しかける.　それも主として戦時中の日本軍の残虐行為についての質問である.　わたしはへたながらもなんとか釈明しようと思って　戦時下の軍隊の様子や　戦前の日本の道徳観念などについて説明これつとめた.　かれこれ1時間半もこうした議論がかわされたであろうか.　奥さんは「わたしはあなたが大変気に入ったから　部屋を貸してあげても良いと思う.　しかし主人が昨夜　戦時中の日本軍の行為を許すことができないから　日本人には部屋を貸したくないといった.　だから今夜もう一晩　主人と話し合った上で　あした返事をする」というのである.　1時間半の議論のはてがこういう返答なのでわたしはいささか憤然としたが　まだ口げんかをするほど英語がうまくもないし　渡英早々に問題を起こしたくないと思って引きさがった.

翌日電話してみると答はノーである.　わたしは日本をたつ前から英国人の反日感情について聞いていたから多少のことは予想していたが　到着早々現実にこうしてぶつかってみると　心臓の強さを誇っていたわたしですら　さすがにカックンとなってしまい　はなはだしく精神的な疲労を覚えたものである.　もっともそれから2年の間　面と向かって反日感情をつきつけられた経験はこのときのみであったが　それでも　たとえば「血の島の収容所」というような反日映画が上映されたり　日本軍の残虐行為をとりあつかった三文小説が今だに出版されていたり　そうした形でチラホラと反日感情をうかがい知ることはあった.

次の日　実験室でインドやスーダンなどからきている留学生たちにこのことを話したら　はなはだ同情してくれて　彼らがいろいろ探してくれその上わたしと一緒に行ってくれた.　おかげで数日中にどうやら満足できる下宿をみつけだすことができた.　インド人たちは　こうした点では　たいへん親切であったが　それも日がたつにつれて　ちがった面でインド人に対して共感できないものを　たくさんみいだすようになってきた.

さて　わたしがいた　Royal　Holloway　College は London 大学に属する女子大学で undergraduate course には男子の学生は1人もいない.　postgraduate course (博士コース) および職員には男子がいるが　大勢は女子専門の college である.　実は　わたしはこのことを日本を出る時には全然知らず　ただ S. Tolansky 教授のことのみを頭に入れて　この college に行くことを希望していたわけである.　だから船がベルギーのアントワープに寄港した際　その近くにある古都ゲントの大学の Amelinckx 博士を尋ねたとき　彼から始めてこのことを聞き知ったときの驚きは　たいへん大きかった.

日本の女性のあつかい方すら知らないわたしに　どうして異国の女学生の間にまじって暮していくことができるのだろうかと　わたしの内心はまことに深刻なものがあった.　女子学生といっても欧米の女性は　大人になるのが大変早いから　日本の女子大生のような青梅のような　感じは全たくなく　いずれも完全なレディたちである.　しかも　いわゆる制服というものはなく　色とりどりにはなやかな服装をして　さっそうと学園内を歩きまわっていたり　ショートパンツでテニスをしている姿はなかなかみものである.

学生数は約350人　物理・化学・動物・植物・数学教室等の理学部系統と　歴史・社会科学・英文・仏文教室等の文学部系統とがある.　undergraduate course の学生は全寮制度で　お城のような感じの校舎は　その大部分が学生や　住み込みの教師等の居室になっている.　学生1人が1部屋づつもっており (教師は2部屋)

ベッド・安楽椅子・机・洋服だんすなどが備え付けで各部屋ともじゅうたんが敷いてある．　なかなか立派な部屋をもっているわけである．　また　各部屋にマントルピースがあり　そのうえセントラルヒーテングされている．　だから生活環境は　日本の大学の場合とは雲泥の差がある．　それだけに授業料（寄宿費を含めて）は年間約65万円と高額である．　もっとも　学生のほとんど大部分が奨学金を受けてそれでまかなっているそうである

postgraduate course の学生は Ph. D. (Doctor of Philosophy) をとるための博士コースの学生たちで　これにはインド・パキスタン・スーダン等の元英領植民地からきている留学生も多数いる．　わたしのいた物理の教室で　このコースの学生５人のうち２人は　留学生であった．　この際ついでに　英国の博士の種類について少し書いてみよう．　英国には２種類の Doctor がある．　１つは Doctor of Philosophy (Ph.D.) 他の１つは Doctor of Science (D.Sc.) である．　D.Sc. は日本の旧制理学博士にほぼ相当するもので　論文審査のみで授与される．　それだけに数は非常に少なく権威が高い．　通例10数編の論文を学術雑誌に公表していることが前提条件になっている．　必要な論文数は　大学によって異なるが最低のもので　13編　通常20編の論文数を必要とされている．　審査料もPh. D. の約３倍である．

Ph. D. はM. Sc. (Master of Science 日本の修士に相当) 取得後　最低２年間大学の研究室で研究に専念した上　専攻した研究の論文を提出し　その論文の審査および専門分野についての口答試問の結果によって授与される．公表論文はとくに必要とされていない．

D. Sc. ではオリジナリテーのみが要求されているのに対し　Ph. D. の場合は　多少のオリジナリテーとともに従来の研究の　critical review　研究方法の記述等のいわば　学術論文を書くための練習的な内容が要求されており　質的には D.Sc. よりも格段にさがる．　普通　研究に専念できる場合　M.Sc. 取得後２～３年で Ph.D. がとれるから 24.5 才程度で　Ph.D.　となる人が多い．Ph.D. を取得すると　サラリーは一挙に２倍近くにはねあがり　また　ちゃんとした研究所などでの採用資格に Ph.D. を必須条件としているところも多い．　たとえば英国の地質調査所では　新規採用は Ph.D. をもっているものに限るように最近ではなってきているようである．

また　インドなどでは　英国の Ph.D. をとるとサラリーは一挙に２倍になるし　地位も昇進するようなシステムになっているので　大学で10年近く奉職したものから選抜して　Ph.D. をとるための目的で大学職員を英国に多数留学させている．　幸いにして　Ph.D. をとることができたこれらインド人の留学生は　まさにわが代の春であるが　もし不幸にして最終試験に合格しなかったものはサラリー・地位が上進しないのみならず　それまでの留学に要した費用を月賦で返済させられるので　まさに地ごくのうき目に合うわけである．

したがって　彼等の Ph.D. をとるための努力たるや英人・インド人等をとわず　正に悲壮なものがある．朝早くから夜中まで　うまずたゆまず　実によく勉強する．　日曜日もほとんど休まず研究室へ出てくるありさまである．　英国人の学生は若い人たちであるから　その程度の労力もたいしたことはないであろうが　インドやスーダンなどからきた留学生たちは　大体　自国の大学の助教授とか講師で　年令も普通35才から40才位までの人たちであるから　その努力たるやまことに涙ぐましいものがある．　しかしともかく　こうした努力の上で Ph.D. という three letters （３文字）をとってしまえばこれが国際的に通用する切符 (international ticket) となり　すべてがうまくいくわけである．　Ph.D. の口頭試問の試験官は　指導教授と他のカレッジ等から呼ばれた試験官の２人で行なわれ　１時間ないし３時間位　提出した論文についての試問が行なわれる．

試験官たちは　数週間前に提出されている論文を十分に熟読し　そこから問題点をみつけ出して　たいへんに突込んだ質問をくりかえす．　Ph.D. 候補者はために顔面そう白になるほどだという話である．

論文審査およびこの口頭試験の結果　やりなおしを命ぜられる人は２～３割ぐらいはいるであろうか．　これに反して合格する人はその場で内示される．　その喜びようは大変で　わたしと同室にいたインドからの留学生

Joshi 君は 試験が終り大丈夫であるという内示をもらうと すぐとんで帰ってきて わたしの手の甲に接吻し それまでに指導し援助してくれたことを感謝し あげくのはてにしくしく泣き出すありさまであった. 彼は名前こそ日本語で「女子」という発音に通じるが 決して女性ではなく れっきとしたインドの大学の物理の教室の先任講師であり 年もわたしより1つ上なのである. その感激いかに深かったか想像にかたくないであろう. 話が前後してしまったが 英国での university と college との違い および University of London の内容は 日本の場合と意味している内容がだいぶ違うので 少し説明しておくことにしたい. 英国でのcollege の意味は大変混乱している. 日本ではアメリカ式に college とは単科大学なりと簡単に考えているが 英国の college はこれとは大部意味が違っており また色々内容の違ったものが一様に college と呼ばれている.
オックスフォード及びケンブリッヂの場合 College とは学生の寄宿舎で 授業は全然行なわないところであるということは 前に述べたとおりである.

ロンドン大学の場合は これとは全く異なり日本の東大とか早大のような University と同じ内容をもっている. だいたい University of London という大学そのものは実在しておらず 10いくつかの college が集まって それらの総称としてこの名前をつかっているのである. したがって University of London は各 College の総合的な事務とか運営をつかさどる機関で これに直属する教室とか研究室は存在しない ロンドン大学に所属する各 College は 大小さまざまで 文学部・理学部・医学部等々 全てをもった総合的な大学もあるし また Royal Holloway College のように 2つ位しか学部をもっていない小規模のものもある.

しかし いずれの場合もさきにのべたケンブリッヂ・オックスフォードの場合と異なり College で授業や研究が行なわれている. しかし Imperial College や University College などのように 純粋に授業と研究のみが行なわれており 学生は 全く宿泊していない College もあるし また Royal Holloway College や Bedford College のように全寮制度で College の校舎の大半が学生の部屋として使われており かつそこで同時に授業も行なわれているといったところもあり教育方針などもそれぞれによって大変違うのである.

さしずめ 日本でいえば 東大・東工大・教育大・早大・慶大・日大などの東京中にある大学をまとめて University of Tokyo と呼ぶとすれば これに University of London が相当しているのだということができよう.

ちなみに 英国には日本でいう国立大学というものは存在せず かって金持や貴族が寄付してできたものとか財団でまかなわれているといった私立の大学ばかりである. もっとも 最近では財政的には50%以上が国庫からの補助でまかなわれているそうである.

さて これら各 College に物理とか化学・地質などの教室があり 教授1名 助教授 (readerという) 1, 2名講師・助手等が数名づついる. このうち教授・助教授は University professor 等と称し University of London が任命し College が任命するのではない.

一方 College そのもので独自の教育を行なうために学長(Principal)学部長(Dean)個人指導の教師(Tutor)等があり この人たちは College の行政 全体的な教育方針・個人教育等をつかさどっている. 他方 各教室の教授は その教室に関する授業・研究について責任を負いそれについての運営の仕方は 学長等から全然さしずを受けない. つまり 教室教授は University から任命されているので University に対しては責任を負うが College に対しては責任を負っていない. 言いかえれば 教育が2本立になっており University から任命された 各教室教授による専門教育と Principal dean tutor 等による人格教育との2本の線でなされているのだといえよう. 教室の教授の数は 日本の場合と異なり 1教室にただ1人である. たとえ研究者の数が数10人に達する大きな教室でも 教授はただ1人に限られている.

たとえていえば 東大の地質学教室で教授は1名だけといった組織だてである. それだけに Professor の社会的地位は高いものであり また しばしば世界的に有名な研究者でも 教授のポストがなくている人も多い

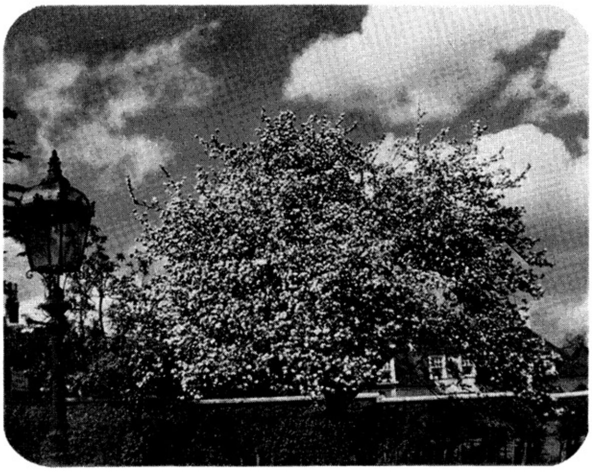
また　理科系の教室は普通　教室(department)と研究(laboratory)の２つに名目上分かれていて　教授が両方の長を兼ねている．　これは研究と教育とを分離している考え方に立っているのであろう．　教室の運営　たとえば　研究テーマの選定　研究費の配分・人事等はほとんど完全に教授の一手に握られており　ワンマン制である．　ただし　研究費が比較的潤沢であるし　また職場を自由に変えるということが常識になっているので　下級研究者の間に　教室運営についての著しい不満というものは余りないようである．　不満を感ずれば　さっさと別の職場を探して移ってしまうのであろう．　このことについては　後ほどくわしく書く予定である．

こうした具合で　権力が教授のところに集中しているので　教授は大変に忙しい．　もちろん　個人の性格によって異なり　弟子のめんどうもほとんどみずに　もっぱら自分の研究にばかり専心している人もあろうし　また　外部を飛び回り　研究費をたくさん集めてくる教授もいるであろう．　しかし　いずれにしても教授職は大変忙しそうである．　わたしのついていたTolansky教授は　普通月火木金の４日間　それも午前中だけ教室にきて　講義をし博士コースの学生から研究の進捗状況を聞き討論し　次のステップを指示し　また研究道具の購入や　手紙の口述をする．　午後はUniversityやD.S.I.R.などの会議に出席するか　他のCollegeでの特別講義をしたり自宅で論文をまとめたりといった大変忙しい日課を送っている．　自分の研究ができるのは夜中だけだということである．　普通　教授は女秘書を１人もっており　秘書は一般に大変有能で　来信の整理　発信の速記とタイプ打ち　論文の清書などいっさい１人で切りまわしており　４６時中タイプを打ちつづけているようにみえる．　お茶のサービス等はいっさいしない．

教授の任命は日本の場合とだいぶ違う　もちろん大学によって　その方法に多少の違いはあるが　基本的には教授職のポストがあいた場合　これを公募するのである．　公募はタイムズとかネーチェアーのような新聞や科学雑誌上でなされ　われこそはと思う人は　自分の履歴・研究成果を書いて応募し　大学内に設けられた選考委員会が決定する．　ケンブリッヂ大学のTilley教授は来年停年であるが　その後任を決めるのは　学会で選考委員会を組織し（これはケンブリッヂ大学の人は参加できない）それが世界的な規模で考え　現在第一線の研究をしている人を選び出して　つれてくるという形をとるそうである．　いづれにしても　教授の決定は大変公平のようであり　かつ学問的な成果・能力等を中心として決定されているらしい．　だから空席になった教室の助教授が昇進するとは限らず　むしろそうした場合の方が少ないようである．

さて　こうして選定された教授の停年は63～65才で大変長い間ポストを埋めるわけである．　停年前に罷免されるということはない．　それだけに教授職に一たんついたら　あとはなまけて研究をしなくなる公算も大きいわけである．　もっともこれに対しては　それをさせないような条件がある．　博士コースの学生が指導教授を選ぶ際に　日本の場合は　ほとんど自分の出身校に限られている．　ところが英国の場合　選択は全然自由で自分のしたいと思う研究について権威をもった教授のところえ　それがCollegeが違っていてもゆくのである．　だから研究成果を絶えず発表している有名教授のところには　それだけ多く博士コースの学生があつまってくる．　博士コースの学生数は　いわば教授の勤務評定に相当するわけである．　したがって自然に教授も研究成果をあげつづけなければならない立場におかれているのだといえよう．

（技術部　地球化学課　砂川一郎技官）



College の敷地内にはリンゴ畑・麦畑・牧場などがある
これは花の咲いているリンゴの木

英国の印象

5月ごろになると　百花がいっせいに咲きはじめ　黄すいせんのお花畑が美しい

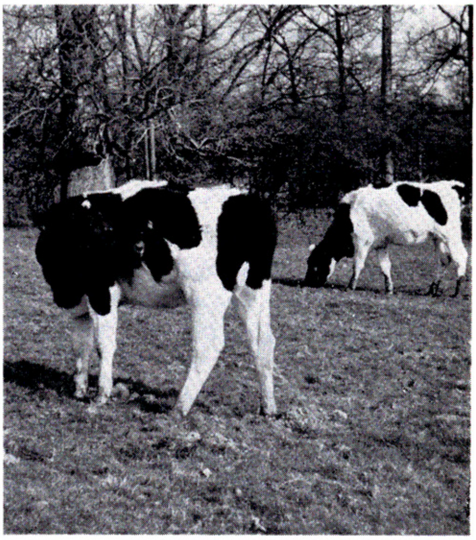
Royal Holloway College の正面時計塔　左側が教会で右側が絵画館

College のうら側　ここは図書館になっている　右手の小窓は学生の個室の窓

College の食堂
学生　職員全部がここで食事をする

ケンブリッジの Kings College のうら　　中央の建物は College の
教会　手前の小川で学生たちが船遊びをする

オックスフォードの Christ Church（カレッヂ）の食堂　　ケンブリッヂでも
オックスフォードでも College の食堂は同じ形式で　周囲の壁に College 出
身者の有名人の肖像画がさがっているここにかかげられるのは大変な名誉で
ある



College の敷地内にある牧場　この牛は毎日
わたしたちに牛乳を供給してくれる

College の物理教室

砂川技官のいた研究室　通称リンゴ屋　これ
でもセントラルヒーティングされている